

メルヴィル文学における＜演技する主体＞

竹内, 勝徳

<https://hdl.handle.net/2324/4110579>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	竹内 勝徳			
論 文 名	メルヴィル文学における〈演技する主体〉			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副 査	九州大学	教授	鵜飼 信光
	副 査	九州大学	教授	高木 信宏
	副 査	九州大学	教授	高橋 勤

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ハーマン・メルヴィルの作品では、他者の声、過去の経験の再生、人間の意識を超えた衝動や繋がり語り手やキャラクターの内面に湧き上がる様がしばしば描き出されるが、本論文はそのような内面で繰り広げられる他者との対話を〈演技する主体〉と呼び、この特徴をメルヴィル文学の本質として捉えることで、すべての長編小説と主な短編小説、晩年の長詩『クラレル』の読み直しを図っている。

第一部は四章からなっており、『白鯨』について論じた第一章から第三章のうち、第一章は短編「二つの教会堂」との比較によって『白鯨』に見られる劇場空間を取り上げる。第二章は書き換え前の『白鯨』テキストと現行テキストを比較することで〈演技する主体〉の要素を両テキスト間の登場人物の中に読み込む試みである。第三章は作品にみられる身体切断のモチーフからメルヴィルの創作技法を論じている。第四章では登場人物の声や音楽表現を分析し、初期作品における自然言語の描き方がホーソーンとの交流の中で変容していったことを明らかにしている。

第二部も四つの章で構成されており、主に『白鯨』以前の作品に焦点を絞っている。第五章は『タイピー』の語り手トンモの視点には見る側と見られる側両方の視点が重ねあわされていることから作品を分析し、第六章は『オムー』において、これまであまり注目されてこなかったロング・ゴーストを〈演技する主体〉として読み直している。第七章は『マーディ』を分析することで〈演技する主体〉にみられる狂気の構造を明らかにし、『白鯨』と関連づける。第八章は、『レッドバーン』と『ホワイト・ジャケット』を取り上げ、〈演技する主体〉と政治的イデオロギーとの関係について論じている。

第三部の四つの章のうち、第九章はホーソーンとメルヴィルの芸術観の違いについての考察である。第十章は、『ピエール』のヒロイン、イザベルにアイルランド移民の表象を読み取る試みである。第十一章は、「バートルビー」と「ベニト・セレノ」を論じ、両作品の登場人物にみられる演技性から作品を解明している。第十二章は、『イズラエル・ポッター』における独立戦争の語り直しが同時代のナショナリズムに反したものであることを論証している。

第四部第十三章はアスタープレイス暴動を大きな転換点と捉え、演劇文化と政治性が『信用詐欺師』のスタイルに結実したことを論じている。第十四章は『クラレル』におけるユダヤ人表象とシオニズム運動の関連性から作品を読解している。第十五章は『ビリー・バッド』をショーペンハウアーの芸術論から読み解いている。終章は島尾敏雄の『死の棘』とその映画化作品をメルヴィルと比較し、個別性と全体性の相克関係を論じている。

以上のように、〈演技する主体〉がメルヴィル文学における本質的要素であることを論証し、メルヴィルのほぼすべての作品を新たな解釈から検討し直した本論文はきわめて重要な価値があるといえるだろう。

以上のように本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。